

乙 貞

第162号 通巻28巻 第5号

平成21(2009)年1月15日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

Tel・Fax 077-585-4397

〒524-0212

守山市服部町2250番地

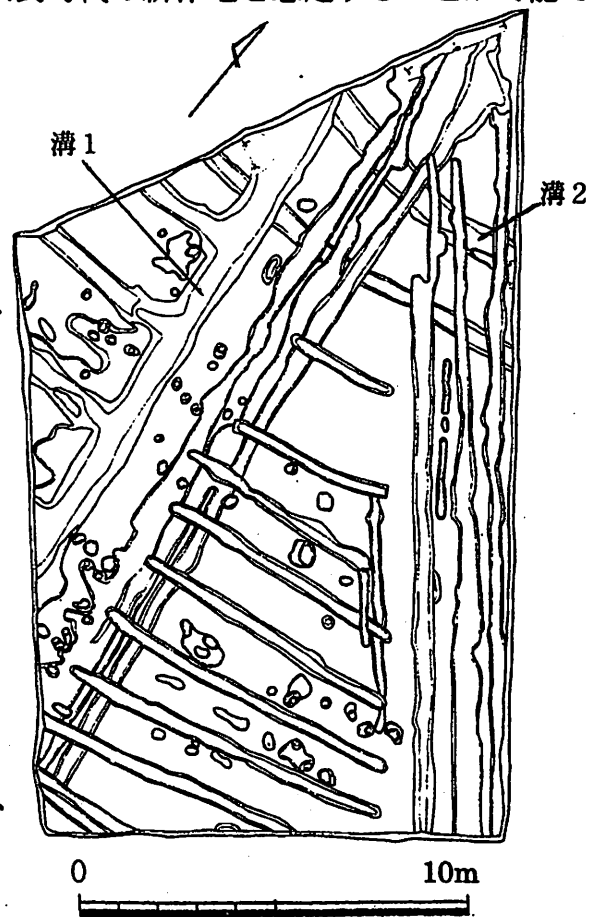
発掘調査だより

1. 益須寺^{やすでら}関連遺跡の調査

吉身五丁目字島田地先において、宅地造成工事に伴い実施しました発掘調査は、11月上旬に終了しました。前号に引き続いて調査成果の報告をしたいと思います。

第2調査区では、多数の溝を検出しました。溝1は第1調査区で検出したものの延長で、幅1m、深さ約50cmで最終的には平安時代中頃に^{まいぼつ}埋没したものと考えられます。北に向かっているのび、各所で^{しりょう}支流が合流しており、水路のような性格が考えられます。その他、奈良時代頃の年代と考えられる東西方向の溝があります。機能面は今後の検討課題ですが、幅約50cm、深さ10cm程のものがほとんどであることから、^{こうさくあと}耕作痕ではないかと考えられます。このような溝群は、益須寺関連遺跡内でも当調査区及び、隣接調査地点(昭和54年度調査)でのみ検出されており、この地点に奈良時代の耕作地を想定することが可能です。益須寺の周辺地帯における、古代の耕作のあり方を考える上で重要な成果といえるでしょう。また調査区北部では、これらの溝群に先行する弥生時代後期の年代と考えられる溝2も検出しています。

今回の調査では、大きく弥生時代後期と奈良・平安時代の遺構を検出することができました。これまで弥生時代後期の遺構は、益須寺関連遺跡内では隣接地点のみで検出されており、今回竪穴住居跡などの遺構が見つかったことで、一帯が弥生時代後期の集落域であったことがわかりました。また奈良・平安時代の遺構では、益須寺に関連する発見は無かったものの、遺跡範囲内の南側に建物跡が集中する一方で、当調査区を含む北側には耕作地が広がることが判明し、この時代における土地活用を考える上で重要な成果であったと言えます (木下)

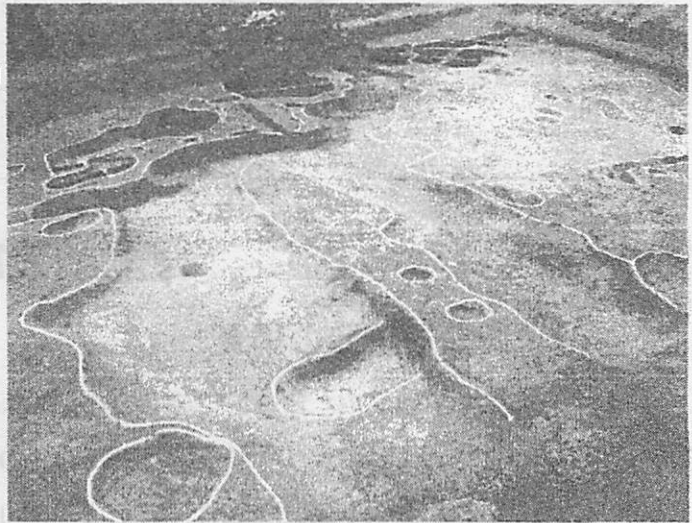


▲益須寺関連遺跡第2調査区遺構平面図

2. 長塚遺跡の調査

小島町字長塚地先において、宅地造成工事に伴い約 2,300 m²を対象に 11 月上旬から発掘調査を実施しています。隣接地点では、弥生時代中期の方形周溝墓を多数検出しているほか、平安時代末期から鎌倉時代初頭の掘立柱建物群が見つっています。今回の調査では、これらの全容が明らかになることが期待されます。

現在、調査は一部が終了したところです。調査区の東側は砂地の遺構面が広がっており、溝・土坑などの遺構を多数検



▲黒色土器や土師器皿が大量に出土した溝

出しています。溝からは遺物の出土量も非常に多く、黒色土器や土師器皿を中心に緑釉陶器や白磁碗などがみつっています。調査区北側では、鎌倉時代初頭の掘立柱建物を少なくとも 3 棟検出しています。これらは隣接調査地点で見つかった掘立柱建物と同じ方向の主軸であり、計画的な建物配置がなされていることがわかります。

調査は 3 月まで実施する予定です。新たな調査成果については、次号で報告したいと思います。(木下)



▲調査位置図

3. 播磨田東遺跡第 17 次調査

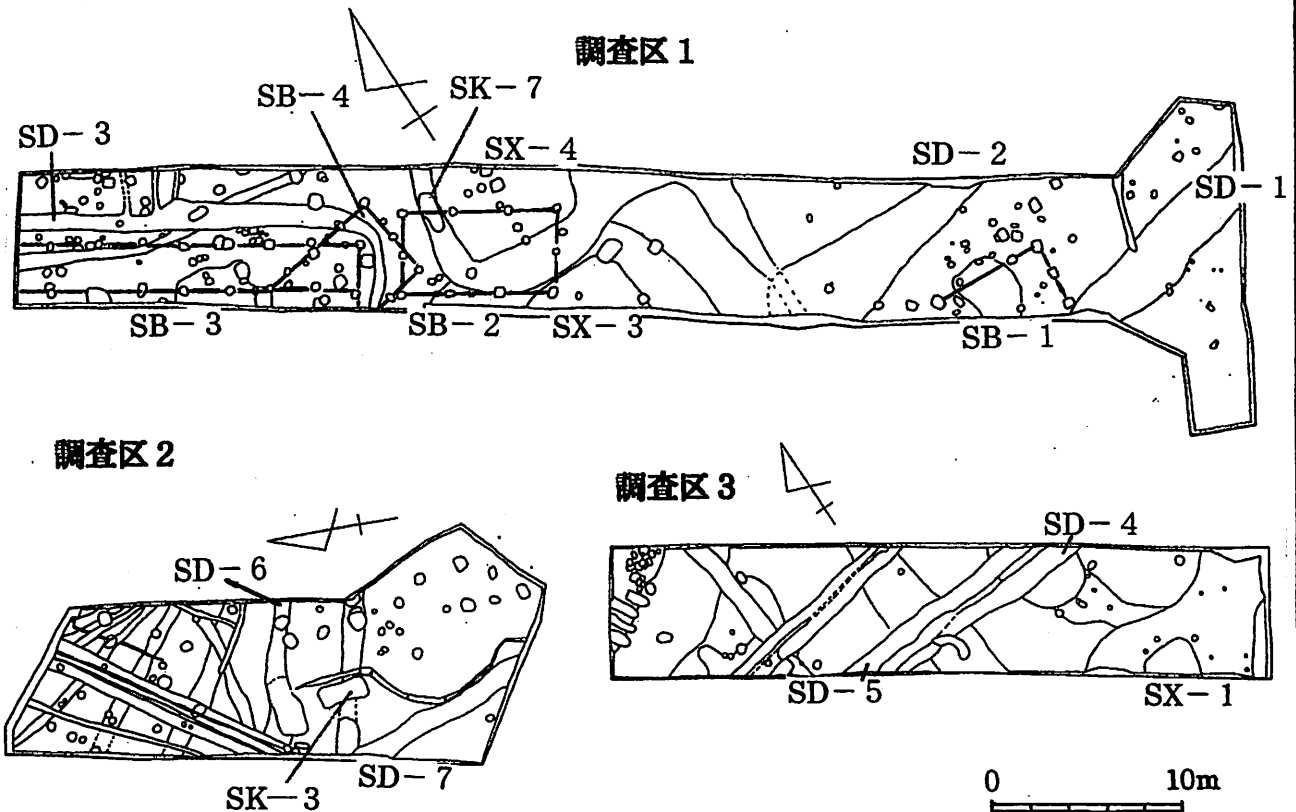
前号で報告しました播磨田東遺跡第 17 次調査は、12 月 10 日に終了しました。宅地造成工事に伴って、道路部分を対象に 3ヶ所の調査区を設定して調査を実施しました。これまで播磨田東遺跡は、縄文時代後期、弥生時代中期後半から古墳時代前期、古墳時代中期、

古墳時代後期から奈良時代、鎌倉時代といった時期の遺構・遺物が確認されていましたが、今回の調査においてはやや異なる調査成果となりました。

まず第1調査区では、弥生時代中期の環濠の可能性が考えられる溝（SD-1・2）や方形周溝墓（SX-3・4）があります。SX-3の周溝からは弥生時代中期中葉の土器、SX-4の周溝からは弥生時代中期後葉の土器と石鏡が出土しています。また、SX-4の周溝内で検出された土坑（SK-7）は遺物が出土しておらず詳細は不明ですが、周溝内埋葬の可能性がります。古代以降のものは、野洲郡条里に沿って建てられたとみられる掘立柱建物跡2棟（SB-3・4）と区画溝（SD-3）があります。SD-3からは緑釉陶器や黒色土器など多量の土器が出土しています。10世紀後葉～11世紀前葉（平安時代中期）の年代が考えられ、有力者の邸宅の可能性が考えられます。その他、古墳時代の須恵器が出土した柱穴や平安時代以前の掘立柱建物跡2棟（SB-1・4）が確認できました。

第2調査区では、弥生時代（詳しい年代は不明）の方形周溝墓（SX-1）、奈良時代の溝2条（SD-5・6）を検出しました。

第3調査区では、弥生時代中期後葉～後期にかけての溝（SD-6）、奈良時代～平安時代の溝（SD-7）や土坑（SK-3）などが確認できました。SK-3は長さ約2.5m、幅約1mの規模で、土壙墓の可能性が高いものです。内部には炭がほぼ一面（長さ約2.1m、幅約90cm）に広がっており、銅製品が南側の同じ層から出土しました。銅製品は長さ約5cm、厚さ2mm程度と小形ですが、詳細は不明です。この炭の層から出土した須恵器から8世紀後葉（奈良時代）の年代が考えられます。



▲播磨田東遺跡第17次調査遺構平面図

播磨田東遺跡では以上のように、これまで確認されていなかった時期の遺構・遺物が発見されるなど、新しい資料を追加することができました。奈良時代の土壙墓や平安時代中期の有力者の建物などは守山市内では珍しく、播磨田東遺跡の性格を考えるうえで貴重な調査成果であったと言えます。今後周辺の調査によって、新たな資料が追加されることが期待されます。

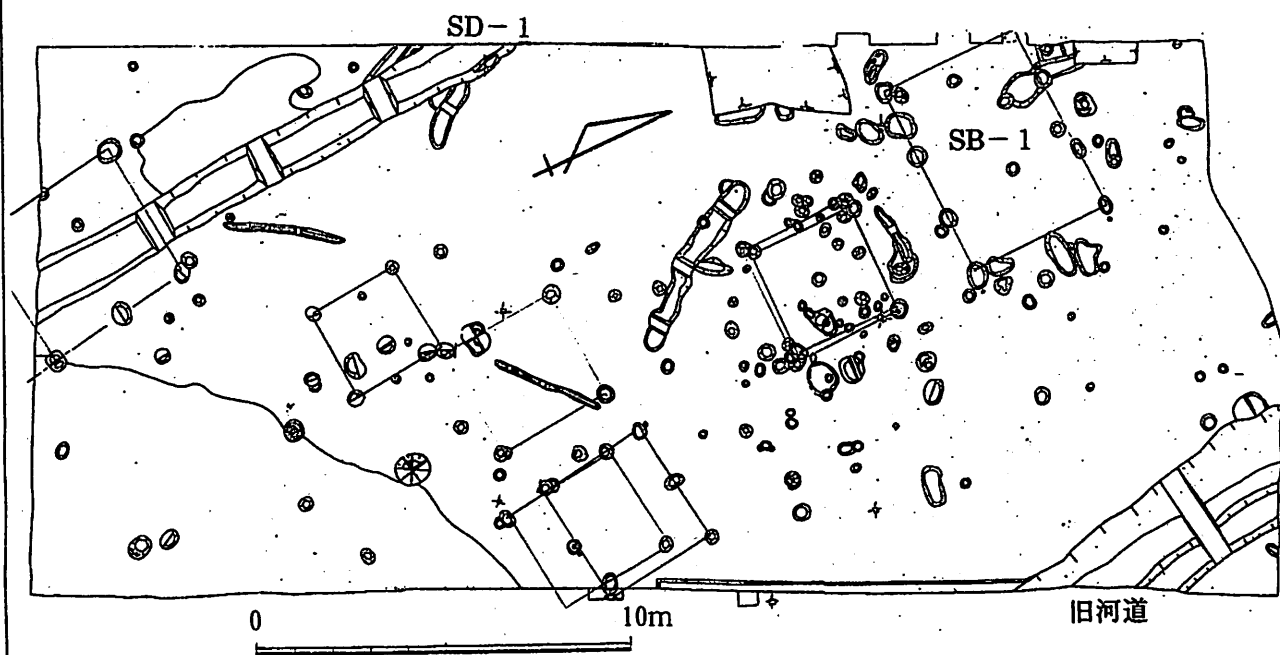
(平井)

4. 下長遺跡第 23 次調査

古高工業団地内で、工場建設に先立ち、10 月後半から発掘調査を進めています。これまでの調査成果からみて今回の調査地点は、方形に巡る区画溝の内側に大型建物を中心とした掘立柱建物群が配置された首長居館^{しゅちやうきょかん}の一角にあたると推定されます。

調査の結果、南北方向にのびる区画溝が調査区南西隅で検出され、居館の東西方向の規模（約 60m）がほぼ確定しました。区画溝（SD-1）は幅 1.2m、深さ 40 cm の規模で、古式土師器^{こしきはじき}が溝底から出土しています。また、南北方向にのびる区画溝に沿って、6 棟以上の掘立柱建物が検出されています。建物は 1 間×2 間、1 間×1 間で、隣接地の調査同様に規模の小さなものが多いのが特徴です。調査区北隅で検出された建物（SB-1）は 1 間×3 間（4m×5m）で床面積 20 m²を測り、今回見つかった建物の中では規模の大きなものです。いずれも古式土師器が出土しており、3 世紀から 4 世紀初頭の遺構と推定されています。今後、北東部に向かって調査区を拡張していく予定ですが、居館内部の様子が少しずつ明らかになるものと期待されます。

(伴野)



▲下長遺跡 23 次調査遺構平面図